



東日本大震災子ども支援募金
ユネスコ協会
就学支援奨学金
レポート2022



公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟

本奨学金プログラムにご協力くださいました皆さまへ



東日本大震災から12年の月日が経ちました。改めて、犠牲となられた方々、ならびに、いまなお被災の影響で避難生活を余儀なくされている多くの方々に、心よりお見舞いを申し上げます。

日本ユネスコ協会連盟は設立以来、UNESCO憲章の精神に基づく草の根の平和運動の柱として、国内外で教育の普及・向上に取り組んでまいりました。どのような環境でも子どもたちの教育が保障されることを目指し、東日本大震災の被災地においては、2025年度までの計画で「ユネスコ協会就学支援奨学金」プログラムを継続しております。

2022年度も、皆さまのご厚意によって、多くの若者たちが高校進学目標を叶え、夢に向かって学び続けることができました。心からの御礼を申し上げますとともに、ここに活動実績の報告を申し上げます。困難な状況にあっても、応援してくださる皆さまへの感謝を胸に、懸命に日々努力する奨学生たちの様子をご覧くださいれば幸いです。

また、当連盟の新たな取り組みとして、昨年度「災害子ども教育支援」事業を立ち上げました。これにより、今後は支援対象を全国に拡大し、近年増加傾向にある自然災害からの教育復興に迅速に対応する取り組みを開始しました。

私たちは、教育の力が人びとの未来をよい方向に変える可能性を信じ、これからも尽力してまいります。引き続き、皆さまの温かいご支援をよろしくお願い申し上げます。

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

会長 佐藤 美樹

2022年度実績

奨学生数	429名
奨学金給付額	1億266万円
2011年度からの累計奨学生数	3849名

支援概要

対象者	地震や津波による家屋の流失・損壊、原発事故の影響による避難などの理由で経済状況が悪化した家庭の、高校進学を希望する中学3年生。 ※震災により保護者を亡くした生徒を除きます。
給付額と期間	奨学生一人当たり月額2万円を返還不要で3年間給付します。 ※中学3年次から高校2年次まで。
対象地域	岩手、宮城、福島の3県で被害の大きかった市町村を特定して実施しています。

東日本大震災子ども支援募金 ユネスコ協会就学支援奨学金 レポート2022

- 01 ごあいさつ
- 02 活動概要
- 03 奨学生レポート1
- 05 奨学生レポート2・3
- 07 被災地から届いた感謝のことば
- 09 かつての奨学生を訪ねて
- 10 被災地のいま
- 11 私たちが12年間で取り組んできたこと
- 13 ご協力いただいた皆さま
- 14 会計報告/ご協力方法

#01 奨学生レポート

奨学生と保護者の12年とこれから

日本ユネスコ協会連盟は、東日本大震災の直後から「ユネスコ協会就学支援奨学金」事業を開始。被災地の子どもたちの学校生活を、これまで継続して支えてきました。震災12年目となる今年も、生き生きと夢を語る奨学生たちの声を集めました。まずは、奨学生とその保護者のインタビューからお届けします。

SCHOLARSHIP STUDENT



菅原一休さん 高校1年生
菅原美智子さん 保護者(祖母)
宮城県気仙沼市

友だちがいて、勉強も楽しい
充実した高校生活です



「興味があったら何でも調べてみます。アニメでも気になることは調べていって、関連する小説も読んだりします」

語り部としていちばん伝えたいこと

気仙沼市の海岸近くに、津波で被災したそのままの姿で建っているのが向洋高校の旧校舎。いまは「東日本大震災遺構・伝承館」として、訪れる人たちに津波の実相を伝えています。ここで、中学1年生から震災の「語り部」として活動しているのが菅原一休さんです。

「伝承館に来てくれるのは、ほとんどが震災を知らない人たちです。でも、僕の説明を真剣な表情で聞き、質問などもしてくれるので、やりがいを感じています」

説明する内容は、先輩からアドバイスを受けながら自分なりに練習を重ねたもの。重苦しくならないように、クイズなども交えながら伝えるようにしています。

「伝承館には、流された車が押しつぶされているなど、津波の破壊力を伝える場所がたくさんあります。でも、全体を通していちばん伝えたいのは『津波が来たら、とにかく高いところに逃げて』ということ。次に津波がくるときのため、とくに若い人たちに伝えていかなければいけないと思います」

南海トラフをはじめ、これから来る地震や津波のときに役立ててほしい。その思いで、高校生になったいまも語り部を続けています。

「一休は、トイレ掃除などの家事もよく手伝ってくれますよ」

親戚の家も含めて11軒が流された

震災では、一休さんの家と祖母の菅原美智子さんの家、親戚の家も含めて11軒すべてが津波で流されたそうです。一休さんはそのとき3歳。父は勤めていた会社も流されて失職、家計は一気に大変になりました。

「黒い屏風みたいな波が、上がり下がりなくばーっとやってくる



奨学生レポート

おばあちゃんは元気すぎて、すごい長生きするんじゃないかと同級生の間で噂になっているんですけど、本当に長生きしてほしいです

菅原家は皆、元気で明るいんです。一休も、お友だちをいっぱいつくって楽しく暮らしているから、それでオーケーかな

んです」と美智子さん。一休さんたちが階上中学校へ避難する一方、美智子さんは海岸近くに住む高齢の両親と姉を車で迎えに行き、高台へと向かいます。

「ところが、すごい波が防潮堤をいとも簡単に超えるのを見て、そこも危ないと。再び皆を車に乗せて、さらに上の神社を目指しました」

やがて雪が降り始め、市街地では火事が広がっていたため、より安全な海蔵寺へ。その後、一休さんたちも合流し、海蔵寺での避難生活が始まりました。

当時、海蔵寺は100人以上の避難者で詰り状態。遺体も運ばれてくるような状況でした。その混乱の中、美智子さんは5人で100人分の食事を朝晩つくり始めました。震災から2日後のことです。

「支援物資を待ってばかりではダメだと。海蔵寺の周りは農家で米も野菜もいっぱいありました。お寺なので大鍋があり、停電でもローソクがある。一休の父は当時ガス関係の会社にいたので、流されたガスボンベを探して安全なものを持ってきてもらいました」

毎朝4時からの炊き出しは5月1日まで続きました。

それから、一休さん一家と美智子さんはそれぞれ別の仮設住宅へ。といっても、幼い一休さんと妹は、母親代わりとなった美智子さんの住まいで暮らすように。パワフルで明るい美智子さんが、二人の成長を見守ってきたのです。

アニメから導かれた将来の夢

一休さんは海洋系の高校で、船や航海に関する勉強をしています。この高校を選んだのは大好きなアニメがきっかけでした。「中学2年のときに観たアニメで、昔の船を忠実に再現していたんです。それで、日本の海をどうやって守ってきたのか、艦名をもとに調べてみました。船の役割とかエピソードなど、いろんな発見があつて。いまの海上自衛隊についても調べるうちに、興味が出てきました」

なりたい職業は海上自衛官。中でも護衛艦に乗って海の警備にあたる、というのが一休さんの夢です。目標が定まっているから、海に関する勉強が面白い。2年になったら、同じ専攻の20人とともに45日間の航海実習もあります。

「実習では、先生の話ちゃんと聞いて、皆で協力していきたい。陸上とは生活が違うので、いろいろと学べるのが楽しみです」

クラスは仲がよく、幅広い友だちもできて、高校生活はとても充実しているという一休さん。その日々を支えているのが、ユネスコ協会就学支援奨学金です。

「制服とか教科書とか修学旅行とか、奨学金があるから、皆と変わらずに学んだり遊んだりできています」

美智子さんも「募金してくださった方々には、ありがたい思いしかないです。一休には、何にでも挑戦して、いろんな人と出会って、たくさん吸収して、楽しく人生を過ごしてほしいです」





「以前はショパンが好きでしたが、最近は不思議な感じのするラフマニノフやラヴェルが好きで、弾いていると本当に面白いです」

高橋玲さん 宮城県岩沼市 高校1年生

高橋玲さんは、ピアニストを目指す高校音楽科の1年生。家では、ピアノ講師の母、陽子さんの手ほどきを受け、陽子さんの恩師からもレッスンを受けています。ピアノを始めたのは5歳ですが、陽子さんは3歳くらいから教えるつもりでいました。ところが、その矢先に震災が起こったのです。

自宅は津波に襲われ全壊。家にあったグランドピアノは泥まみれとなり、壊すしかありませんでした。住む家もピアノもなくし、陽子さんはピアノ講師の職を失います。避難生活を送ることとなった夫の実家にピアノはありましたが、夫の姉がピアノ教室を開いていたため、まとまった練習はできません。それでも玲さんが5歳になると、生徒さんたちのレッスンが終わる9時ごろから練習ができるように。「練習は夜12時近くまで続くこともあって、眠くて大変でした。でも、いろんな曲を弾くのがとても楽しくて、続けてよかったなと思います」

避難生活の中、借りもののピアノで練習を始めた玲さんは、わずか3ヵ月でコンクールに出場。予選と本選を見事、通過し、東京の入賞者コンサートでも演奏したそうです。「とくに緊張もせず、楽しいという気持ちがいちばん頭にありました。ピアノは本当に奥深くて、練習を続けるうちにますます好きになって、もっと上手になりたいと思いました。これまでやめたいと思ったことはないし、ずっとピアノを弾いてたいです」

いつか人の心に寄り添って届く演奏を

中学時代とは違い、ピアノを専攻するいまは、学校にいる間もピアノや音楽に関わっています。学校と家を合わせると、毎日

ピアノが大好きだから
ずっと弾いていたいです



「学校でいちばん楽しいのは、友だちや先輩たちと音楽やコンサートなどについて話しているとき。勉強も好きです」

3、4時間は練習しているとか。「電車通学で往復2時間くらいかかるので、家に帰ると疲れて寝てしまうこともあります。中学に比べると大変になりましたが、高校では、ピアノ以外にもいろんな楽器をやる人がいて、声楽の人は自分の声が楽器になっているし、皆のめり込んでいるすごいと思う。だから、自分も皆みたいになりたいと思って頑張っています」

両親が家を再建したのは約8年前。陽子さんは親の援助で中古のピアノを買い、講師の仕事を再開しました。それでも、家のローンに、玲さんの高校の授業料やピアノのレッスン料、コンクールの出場費用など家計は常に変です。「私はピアノをやっているだけで、まだ両親を手伝えることがないのですが、これからたくさん二人のことを支えられたらいいと思います。そして、いつか人の心に寄り添って届くような、温かい気持ちになれる演奏ができるようになりたい。そうなることで、奨学金に寄付していただいた、顔も名前もわからない方々にも恩返しをしたいです。そのために、これからも努力を続けていきます」



コンクールにもたびたび挑戦して技術力や表現力を磨いている

上林美玖さん 岩手県下閉伊郡山田町 高校2年生

風光明媚なリアス海岸が続く三陸沿岸部は、東日本大震災だけでなく、過去に何度も大きな津波に襲われています。それらを伝える石碑が各地に残されており、山田町にも10基以上あるそうです。美玖さんが通う山田町の高校では、「総合的な探求の時間」で、この津波碑を伝承する活動に取り組んできました。美玖さんのクラスは1年のときに、津波碑の説明パネルやガイドマップをつくる作業を行いました。

「古い石碑の文字が全然読めなくて、町の方から資料をいただいて解説しました。石碑には先人の皆さんが教訓を書いてくれています。それを知らないままにしておいてはダメだなと強く思いました」

過去の教訓を未来に生かそうという取り組み。同じ「探求の時間」で、今年は山田町の復興や観光について学ぶそうです。震災後12年が経ち、空き地は目立つものの、町は元気を取り戻したかに見えます。

「津波とその後の火災で、本当に何もなくなってしまいましたが、その分、新しくどんどん町ができてきて、悪いことばかりでもないなと思います」

将来の夢は、市町村の公務員となって町を元気にすること。山田町でなくても、三陸沿岸ならいいと美玖さんはいいます。

「海が好きだから。三陸の町と海を守りたいです」



自分のやりたいことをできるように

美玖さんが自宅で震災に遭ったのは4歳のとき。車で美玖さんたちを避難させた祖父は、皆を降ろした後、車に乗った

「山田町は、震災後に減った人口が増えてほしいし、観光でも人がいっぱい来てくれたらいいなと思います」



まま流されてしまいました。けれども翌朝、満身創痍で避難場所に戻ってきたといいます。どうやって車から出たのか、気がついたら木につかまって流れていたとか。

「おじいちゃん、あちこち怪我していて青ざめていて、そこで津波の怖さを実感したように思います」

九死に一生を得た祖父と祖母、そして親子3人で、震災後は仕切りもない体育館に7ヵ月。さらに仮設住宅での暮らしは7、8年におよびました。母の由香里さんはいます。

「避難所生活で美玖が泣いたのは一度だけで、環境にも食事にも不満をいうことなく頑張っていました。だから、優しい子ですが、我慢強い子になってしまったように思います。これからは我慢せずに、自分のやりたいことをできるようになってほしい」

そんな美玖さんの高校生活を支える奨学金。今年は楽しみな修学旅行もあります。「制服や文房具のほか、奨学金は修学旅行の積み立てにも充てています。奨学金がなかったら本当に大変でした。支援していただいととても感謝しております。ありがとうございます」と由香里さん。

生徒会ではトルコ・シリア地震のとき街頭募金に立ち、ボランティア活動にも積極的に参加する美玖さん。町や人のために思いながら、のびのびと充実した高校生活を送っています。

※津波碑をはじめ、山田町の復興についてはp10「被災地のいま」でも紹介しています。

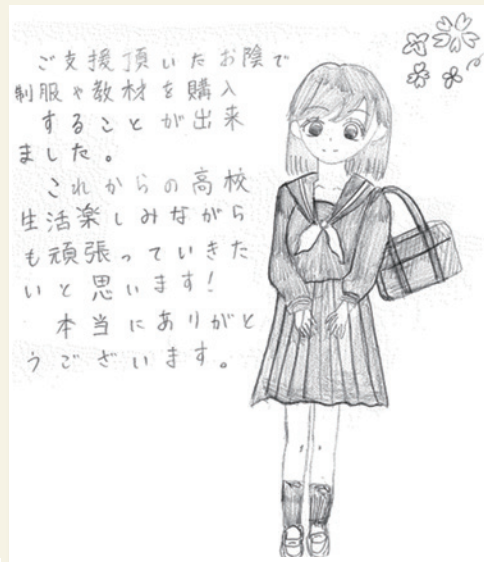
三陸の海が好きだから



ここが美玖さんのいちばん好きな場所。「高い防潮堤ができて見えなくなった海が、全部見えます」

被災地から届いた感謝のことば

奨学生・保護者から届いた声をご紹介します。



(岩手県釜石市)

初めに、ユネスコ協会就学支援金の御支援をいただける事に対して、心お感謝致します。
私は料理の興味・関心があり、私の入る高校では専門的な知識を得る事が出来ます。
高校3年間でしっかりと勉強をして将来の役に立てたいと思います。そして勉強だけでなく、芸術活動にも力を入れて文武両道を目標にがんばりたいと思います。



(岩手県大船渡市)

全国の皆様、支援して頂き本当にありがとうございます。

私の家庭は大家族で親も同僚の友達の親よりも歳が上の方なので、兄弟も多いので学費やお弁当等、大変ですが奨学金のおかげで定期代やお弁当のおかげで、学用品等とても助かっています！！
テストでは、英語の点数を全学期クラス1位を最後まで維持出来る事が出来ました！！
四月から二年生になり勉強が今よりも難しく大変になるので、これ以上にも勉強を頑張っていきたいです！

今後共 宜しく宜しくお願いします。

2021年度生

高校2年生
2023年現在



(宮城県石巻市)

ユネスコ協会就学支援奨学金募金者の皆様へ

今年で東日本大震災から12年という月日がたちました。当時、4歳だった私も今は17歳をむかえ、毎日楽しく高校生活をおくっています。まだ幼かった私ですが震災当時の“記憶”はずっと残っています。地震が発生した時間、私は保育園にいました。先生や友達と園庭の真ん中に逃げて身を寄せ合い、何が起っているのかも理解できないままひたすら親の迎えを待っていました。時点を今に戻し、高校1年生の時の総合の授業で震災について調べ、まとめる機会がありました。タブレットでパワーポイントを作成し、まとめたのですが、そのタブレットは奨学金で購入させていただき、皆様からいただいたお金で震災の記憶を“記録”にすることができました。学年発表では代表に選ばれることもあり、様々な面で感謝しています。ありがとうございます。

(福島県いわき市)

震災では家を失いました。幸い家族全員無事でした。当時3歳だった私は「水がない」「電気がない」「食べるものがない」と困難な中でもたくさんの方々の支援のおかげで元気に過ごすことができたのを覚えています。

私は5年生から始めた野球がとても大好きで、高校・大学・社会人になっても続けたいと思っています。そして、今年から志望校である地域の高校に合格し、野球ができることになりました。こうして高校に通い、大好きな野球ができるのは寄付していただいた多くの方々のおかげです。ありがとうございます。震災から13年、まだまだ町は復興途中ですが、自分ができることが何かを考えながら高校生活を充実したものにしたいです。

(宮城県気仙沼市)

2022年度生

高校1年生
2023年現在



3年間ご支援ありがとうございました。
今後の目標は、日商簿記3級を取ることです。進路決定に向けても頑張っています。残りの高校生生活も楽しんで悔いなく卒業したいです。



(宮城県気仙沼市)

保護者



3年間のご支援ありがとうございました。心より御礼申し上げます。

東日本大震災で、家屋と会社が流れ、あれから12年の全てを失い、中学校体育館での生活から5回の転居がありました。生活の立て直しの中で、皆さまからいただいた支援金は大変有難く、おかげで4人の子どもたちは不自由なく学校生活を送ることができました。本当に感謝しております。

末っ子は高校3年生になります。夢は弁護士だそうです。たくさんの方々の困った人を助けることが出来る人になりたいそうです。現在自宅を離れて寮生活をしながらか大学進学に向けて頑張っています。皆さまの支援金のおかげでここまでくることが出来ました。もうひとふんばりです。皆さまにおんがえしが出来るように、夢にむけて頑張っていかせます。温かいご支援本当にありがとうございます。

(宮城県気仙沼市)

かつての奨学生を訪ねて

震災から12年、これまでに多くの奨学生たちが社会へと巣立ちました。かつての奨学生たちは、描いた夢に近づいているでしょうか。今回は、震災を乗り越えて水泳に向き合ってきた元奨学生を紹介します。

菅原笑華さん 宮城県大崎市 特別支援学校教員

奨学金受給期間 2011年～2013年

菅原笑華さんが気仙沼市内で水泳を始めたのは幼稚園のころ。初めは遊びの感覚でしたが、少しずつ頭角を表していきます。けれども、小学6年の卒業式直前に東日本大震災が発生。家も学校も被災、通っていたスイミングクラブも被災したため、地元のプールで泳ぐことはできなくなりました。「選手として結果を残し始めたころで、当時は週に6日、土曜日は2回も練習に通っていました。泳ぐのは楽しいけれど、練習はきつかった。だから、いざ泳げなくなると、また自分を追い込もうという気持ちがなくなっていました。もうきついことはなくていいんだ、と」

別の町のプールに行き始めたものの、「水泳はしばらくいいかな」と練習は月1回のペースに落ちていきました。「ところがある日、もう少しレベルを上げたいという気持ちが芽生えてきたんです」

練習場を石巻市のクラブに替え、父の送迎で週3回通うように。当時は高速道路が気仙沼までつながっておらず、片道1時間半の道のりでした。それからは少しずつ成績を上げ、高総体で県1位をとるまでになったのです。「試合の遠征費や競泳用の水着代、送迎の交通費など、水泳には結構お金がかかります。父は市場で働いていたので、震災で職を失っていた時期があり、ローンの残っていた自宅の再建も大変でした。奨学金があったから水泳を続けてこられたと思っています」



「奨学生の皆さんには、好きなことだけは諦めず、全力で取り組んでほしいです」

以来、水泳は笑華さんのライフワークとなり、社会人になりたいまも国体出場を目指して練習を続けています。

「笑華先生なら」と思ってもらえるように

水泳を続けながらスポーツに関わる仕事がしたいと、保健体育の教員免許をとった笑華さん。特別支援学校の教員となつて3年目となりました。今年、担当しているのは中学1年生。とても元気がよく、いい意味でエネルギーを吸い取られているとか。一方、排泄がうまくいかない、給食の好き嫌いが激しいなど、課題のある生徒もいます。「支援学校の生徒は、何でもすぐにはできないし、できそうできないことが続きます。でも、生徒との距離を少しずつ縮めながら、時間をかけて『やっとできた』というときは嬉しい。粘り強く、忍耐強く、というのは水泳と重なる部分があるのかもしれない」

そして、自信を持ってない生徒には、学校生活の中で「自分にはこれができる。自分の長所はこれだ」というものを一つでも見つけて、卒業後は胸を張って生きてほしい。だから、よかったときは全力でほめ、生徒のいいところを見つけれれる先生になりたいといいます。「えみか先生なら話ができる」と安心して生徒たちに思ってもらえるように。それがいまの目標です。



一度は諦めかけた水泳
これからもずっと続けたい



得意種目はクロール。迫力ある泳ぎを見せる大学時代の笑華さん

「水泳はおばあちゃんになってもやりたい。陸にいるより水にいる方が楽なので(笑)」

被災地のいま

三陸海岸のほぼ中央に位置する岩手県下閉伊郡山田町。東日本大震災の大津波や、その後の大規模火災により壊滅的な被害を受けました。それから12年が経ち、さまざまな分野で復興が進み、現在は町の「再生」から「発展」へと歩み続けています。過去の教訓が途切れないよう、先人の思いを未来につなぐ活動を行う一方、観光政策に積極的に取り組み、地域経済の活性化へとつなげる町のいまを、写真とともにご紹介します。

山田町の誇り、三陸の海とオランダ島



提供：山田町

オランダ船「ブレスケンス号」が漂着したことから名づけられたオランダ島(写真中央)は、東北唯一の無人島の海水浴場があることで知られる。2020年には、震災以来10年ぶりの海開きが再開され、以降、観光復興の目玉のひとつとなってきた。島周辺には海いっぱい養殖いかだや漁網が並び、豊かな山田湾を象徴する風景となっている。山田町でもっとも重要な産業のひとつが漁業。その様子を見学・体験できるツアーをはじめとする体験型のプログラムが企画され、山田観光の魅力を伝えている。

津波被害の教訓、大海嘯記念碑



山田町を襲った過去の津波被害の教訓を伝え続けるための記念碑。山田町には津波碑が計14基あり、左の2基は1933年(昭和8)昭和三陸津波の翌年に建立された。「大地震の後には津



波が来る」「津波に追われたら何処(どこ)でも此処(ここ)位高い所へ」など命を守るための先人の5つの教えが刻まれており、今日も山田町を見守っている。

山田町のいま

津波による悲劇だけでなく、津波火災にも見舞われた山田町には被災の大きな爪痕が残った。しかし、この12年で復興が進み、新しい建物が増え、町は再生している。背後に見える豊かな山々と美しい山田湾とともに歩んできた町の本来の姿を取り戻し、そこからさらに発展しつつある。

提供：山田町
2020年9月撮影



山田町津波碑ガイドマップ

山田町と岩手県立山田高等学校が協働で行う「津波震災伝承事業」のひとつ。実際の津波碑を確認し、碑文を解説するなどの活動を通じて学びを深めた。2019年度の高校1年生が3年間、過去の津波について学ぶ中で周知する必

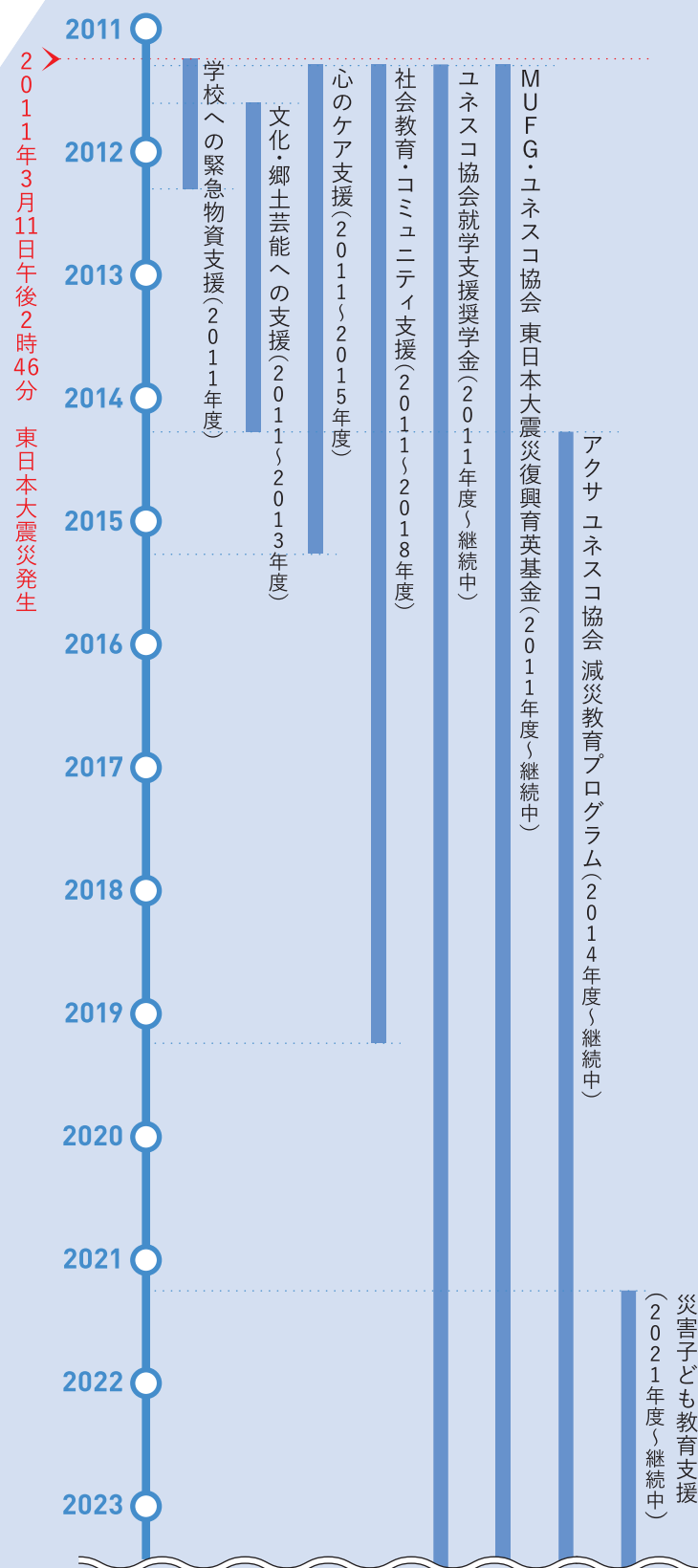


提供：山田町

要性を提案し、思いを受け継いだ1年生が2023年2月にガイドマップを完成させた。今後はさまざまな震災伝承活動に活用される予定。(p6に関連記事)

私たちが12年間で取り組んできたこと

東日本大震災子ども支援の主な活動



支援活動 1

学校への緊急物資支援

学校を再開するために、まず行ったのが緊急物資支援でした。被災により学習に必要な備品が流失してしまったため、144校・2教育委員会に対し、学校のニーズにあわせて、教材や体育用具などの支援物資を届けました。また、仮設住宅や避難所と、学校とをつなぐスクールバスも寄贈しました。



支援活動 4

社会教育・コミュニティ支援

被災地では、仮設住宅で暮らすなど、生活環境が大きく変化しました。被災地のコミュニティ再生を目指して、コミュニティ図書館、学童保育所、移動図書館車、相撲場などを支援しました。



支援活動 7

アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム

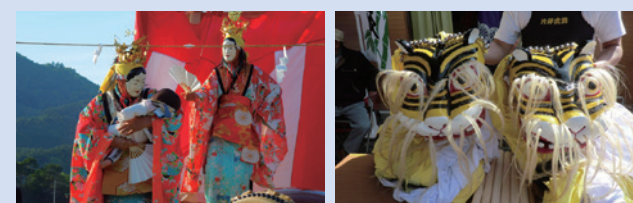
東日本大震災の経験や教訓を全国の学校防災につなげるために、学校への活動助成、教員研修会、活動報告会・減災教育フォーラムを実施しています。



支援活動 2

文化・郷土芸能への支援

震災によって危機に瀕した東北の祭り・文化を救ってほしい。そんな被災地の声を受けて、失われつつある日本の自然・文化を未来へ伝える「未来遺産運動」の一環として、人びとの気持ちをつなぐ郷土芸能や祭りへの物資支援を実施しました。



支援活動 5

奨学金支援

ユネスコ協会就学支援奨学金

経済状況が悪化した家庭の子どもたちが安心して学校に通えるように、返還不要の奨学金を3年間にわたって支援する活動を行っています。



支援活動 3

心のケア支援

地震と津波への恐怖から強い不安を抱いている子どもたちの、心理的ストレスをやわらげるために、夏休みにキャンプや絵画コンテストなどを実施しました。



支援活動 6

奨学金支援

MUFG・ユネスコ協会 東日本大震災復興育英基金

両親もしくはいずれかの保護者が死亡・行方不明になってしまった子どもを対象とした、返還不要の奨学金を支給しています。その他、TOMODACHI・MUFG 国際交流プログラムなど、子どもたちの心豊かな成長を応援する活動も行いました。



支援活動 8

2021年度
スタート!

災害子ども教育支援

日本ユネスコ協会連盟では、東日本大震災後の12年間、被災地の子どもたちが経済的な理由で夢や進学をあきらめることのないよう、支援を続けてまいりました。

「災害子ども教育支援」は、この「東日本大震災子ども支援」の後継事業として2021年度に始まりました。今後、国内で大規模な自然災害が発生した際、教育現場や子どもたちの学びを支えるため、下記の3つの支援プログラムを柱としています。これまでの活動の教訓を生かし、災害の規模や現場のニーズに応じて迅速に支援を行います。大きな災害が起きても、子どもたちの教育が守られる環境づくりへ。引き続き皆さまの温かいご協力をお願いします。

- 支援内容
- ①被災地の学校等に対する教育復興のための支援
 - ②被災地の子どもたちに対する給付型の奨学金支援
 - ③被災地の復興を支えるユース・ボランティア活動に対する支援

ご協力方法につきましてはP14をご覧ください。

※本事業における支援対象（災害規模・対象者・内容など）の詳細については、別途定めたガイドラインに基づき実施します。



2022年度も多くのご支援をいただきました

ユネスコ協会就学支援奨学金は、以下の企業・団体をはじめとする多くの皆さまのご協力で支えていただいています。この場をお借りして、改めてお礼申し上げます。

 あいおいニッセイ同和損害保険株式会社	 アクサ生命保険株式会社	 旭酒造株式会社	 NTTドコモグループ 災害復興等応援社員募金
 株式会社光明工事	 一般社団法人 全国信用金庫協会	 フォーエバーリビングプロダクツ ジャパン	 ブルーチップ株式会社
 株式会社ベルセレージュ本社	 株式会社ほるぷエアアンドアイ	 三菱UFJニコス株式会社	 ヤフー株式会社

※50音順・敬称略

ご協力
いただいた
ユネスコ協会

知床ユネスコ協会	旭川ユネスコ協会	石狩ユネスコ協会	釧路ユネスコ協会
室蘭ユネスコ協会	花巻ユネスコ協会	北上ユネスコ協会	北茨城ユネスコ協会
寄居地方ユネスコ協会	名古屋ユネスコ協会	徳島ユネスコ協会	

ご協力
いただいた
皆さま

個人募金者の皆さま

全国の個人募金者の方々から多くのご支援をいただきました。

子どもたちから子どもたちへ

幼稚園から大学まで、子どもたちや学生の皆さまからも、心のこもったご寄付が寄せられました。

企業・団体の皆さま

上記でご紹介しきれなかった企業・団体の皆さまからも、たくさんのご協力をいただきました。

会員の皆さま

ユネスコ協会・クラブのほか、維持会員、賛助団体会員、個人会員の皆さまからも、ユネスコ精神のもと温かいご協力をいただきました。

2022年度会計報告

東日本大震災子ども支援募金事業 (2022年4月1日～2023年3月31日)

※ユネスコ協会就学支援奨学金は、原則として、奨学生1人につき3年間にわたって支援します。
 ※次期繰越金は、2021年度に採用した奨学生の3年目分の給付に係る事業費用および2022年度に採用した奨学生の2～3年目分の給付に係る事業費用、そして2023年度に新規採用する奨学生の3年間分の給付に係る事業費用などを含む2023年度以降の本奨学金事業に使用されます。

ご協力方法

いつ、どこで起こるかわからない自然災害
 どんなときも子どもたちの学びを守るために
災害子ども教育支援

東日本大震災を受け、2011年度から行ってまいりました「ユネスコ協会就学支援奨学金」は2025年度まで続く長期支援プログラムです。奨学生の新規採用は、2023年度が最後となり、ご寄付の受付も2023年3月末をもって終了いたしました。
 自然災害被災地の教育支援事業へのご寄付は、対象を日本全国に拡大した「災害子ども教育支援」で引き続き受け付けております。東日本大震災の教訓を生かし、近年、増加傾向にある大規模災害の発生後、迅速な教育支援を目指します。
 皆さまのご協力をお願いいたします。

郵便振替による募金

ゆうちょ銀行または郵便局からご寄付いただけます。

郵便振替 00190-4-84705
 加入者名 公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

※通信欄に「災害子ども」とご記入ください
 ※振込手数料はかかりません
 ※領収書が必要な方は、大変お手数ですが、当連盟までご連絡ください
 ※同封の払込取扱票もご利用ください

毎月の継続的な定額募金『月1・いいことプログラム』

■クレジットカードの場合

ホームページから直接お申込みいただけます。

月1いいこと
 unesco.or.jp



■口座振替の場合

口座振替申込書をお送りします。お手数ですが、ご希望の方は当連盟までご連絡いただきますようお願いいたします。

ユネスコ協会就学支援奨学金

項目	金額(単位:円)
前期繰越	301,865,870
寄付額	104,422,181
支出額	115,187,116
①奨学金	102,660,000
②事業経費	12,527,116
次期繰越	291,100,935



※日本ユネスコ協会連盟へのご寄付は、寄付金控除などの対象になります。

インターネットからの募金

ホームページからクレジット決済による募金をお申込みいただけます。

ユネスコ
 unesco.or.jp

検索



遺贈

遺言によりご自身の財産を贈与(寄付)いただく方法です。不動産の遺贈や相続財産の寄付などのご相談もお受けしています。ご希望の方には手続き方法などを掲載した資料をお送りいたしますので、当連盟までご連絡をお願いいたします。

お問い合わせ

〒150-0013
 東京都渋谷区恵比寿1-3-1 朝日生命恵比寿ビル12階
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟
 TEL: 03-5424-1121 (9:30～17:30/土・日・祝日を除く)
 FAX: 03-5424-1126
 メール: nfuj@unesco.or.jp (代表)
 kodomo@unesco.or.jp (災害子ども係)

日本ユネスコ協会連盟の活動

私たちは「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と謳^{うた}う国際連合教育科学文化機関(UNESCO)の理念に賛同し、全国に約270あるユネスコ協会・クラブとともに1947年から草の根で活動続けるNGOです。

平和な世界を構築し持続可能な社会を推進することをミッションに掲げ、国内外でさまざまな活動を展開しています。国連が提唱する持続可能な開発目標=SDGs(Sustainable Development Goals)のうち、とくに目標4「質の高い教育をみんなに」を重点ゴールに据え、達成に向けて以下のような事業に取り組んでいます。

※2022年度の活動については別冊「2022年度活動レポート」をご覧ください。

いつか起こる災害から 子どもたちの未来を守る

災害子ども教育支援



学校における 減災教育をサポート

アクサ ユネスコ協会
減災教育プログラム



学校との連携を通じた SDGs教育の充実

SDGs達成に向けた次世代教育



日本の自然や文化を守り伝え、 持続可能な地域社会に貢献

未来遺産運動



途上国での専門的な人材育成、 子どもの文化学習を促進

世界遺産活動



途上国の学びを支える さまざまな教育支援

世界寺子屋運動



日本ユネスコ協会連盟ホームページ
<https://www.unesco.or.jp>



公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟



私たちは持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。